

## 【講演録】

アリスセンターシンポジウム(2023.4.22)

### 基調講演 「小さき声」を集める意味～多様性と包摂性のある社会をめざして～

播磨靖夫さん(一般財団法人たんぼぼの家 理事長)

おはようございます。紹介をしてくれました播磨です。僕は障害があっても不幸にならない未来をめざしてということで50年やってきました。それがまた市民活動でもあるんですね。50年やってきた。そこでいろんなことを、いろんな人たちとの出会い、いろんなことを学んだことがいっぱいあって、いま主には障害者のアートとか、あるいはケアというかな、ケアリング・ソサエティとかそういう感じでの話をする機会はあるけれども、市民活動について話すことはあまりなくて、80を超えると、これまでやれたことがだんだんできなくなって、あと残り時間短いなって実感しております、こういうときに話す機会をつくっていただいて、本当にありがたく思っております。今日はそういう50年の市民活動の歴史について、話をする機会を感謝しつつ、お話をしたいと思います。

我々のルーツは重度の障害児を抱えた母親たちが立ち上がって、自立の家をつくるという運動を始めたのが始まりです。それが市民運動になり、そしてたんぼぼの家という地域に開かれた施設をつくり、それが障害のある人たちのアート活動をする、アートセンターHANA というのができ、さらに、障害のある特に精神の人たちを中心にする Good Job!センター、ニュートラディショナルということで、新しい伝統工芸をつくる、ポップクラフトですね、そういうものをつくり、この50年の歩みを2月に奈良県の文化会館というところで、たんぼぼの家大展示会をやりました。これはすごい今までの歴史を振り返ったわけですけど、さらに大変なことは、それを見た大阪の高島屋の方が感動されて、高島屋でこれをやりましょうと、いま開催中なんですね。これはなんかね、商業施設が市民活動をもつていく歴史的にあるいはビジュアルに見せる、商業主義と我々には言いますが、商業施設の持っている機能とかノウハウを見事に発揮して、こんな展示会が大きな催事会場のスペースでやっている。この間実はここへ来る前に見てきましたけれど、多くの方が来てくれて見てる。アートセンターHANAの障害のあるアーティストがギャラリートークをやっている。みんな自信満々に堂々とやっているわけですね。後ろで聴いていました。こういうことが起こるんだなと思ったんです。なかなか自分たちの活動歴を全部見せて、パノラマの様に見せていくというのはなかなか大変なんですけども、それをデパートというところが取り組んでくれた。非常に感動して帰ってきました。もし時間が、月曜日までやっておりますので、観ていただいたらいいと思います。

さて、今から60年前の話でございますけれども、弱い側に立った仕事をしたいという

ことで、僕は大学を出て新聞記者になりました。そういう志をもって仕事に打ち込んだのですが、ちょうどそのころは日本は高度成長の時期で、ものすごく勢いで開発が進んでいたということなんですね。そのころ我々は、豊かになったら幸福になれるという、いわゆる成長神話を疑いもなく信じておりました。ところが、僕は四国の高松に転勤になって行ったときに、四国のきれいな海岸が、埋め立てられて工場団地になり、海は工場排水あるいは生活排水で汚染をするので赤潮が発生した。そういうのを目の当たりにして、今でいう環境保全のキャンペーンをやっていました。そのときに出会った本があります。それはアメリカの生物学者のレイチェル・カーソンという人が書いた『沈黙の春』という本。生産性を上げるために農薬を撒いて、その農薬で虫たちは死んでいく。その虫を鳥たちが食べて鳥たちも死んでいく、春になっても鳥のさえずりは聞こえないという、そういう本なんですね。この本を読んだときに大変大きな衝撃を受けたんです。それは何かというと生命の連鎖ということです。命はすべてつながっていることですね。今でいう、生命科学、生命哲学というかな、そういうものをレイチェル・カーソンの本から学んだわけです。これが僕のその後の人生の通奏低音になっています。

そういうことで障害者のキャンペーンをやったときも、このいろんな障害のある人やその家族の声を新聞で連載したりしてましたら、そのときに痛感したのは、行政とか社会にその小さな声が届いていないということですね。それはキャンペーンくらいでは届いたと言えない。本当に障害のある人たち、あるいはその家族の声を、行政や社会にどう届けたらいいのかということ、ずっと考えていたわけです。まあそれが市民運動というものになっていきます。その間ずっとかかわっている間に感じることは、大きな構造の中で弱い立場のひとたちがやっぱり犠牲になっているということをあらゆるところで痛感しました。豊かで便利で公正な社会をめざすということは、社会全体はそういうことを言っておりましたけども、なぜこんな社会なのかということは僕の一番痛感していたところなんです。小さきものたちと大きな組織の闘いというものに加担をしていったわけです。

作家の池澤夏樹という人が、僕はちょっとファンなんですけども、この人があるところを書いてるものがあります。「公は理でしか動かない。それは実は利であり、しばしば偽である。そこに情を持ちこんだらどうだろうか。人は情によって生きるものであるから。」というようなことを池澤夏樹さんは書いておられます。公(おおやけ)あるいは企業のような大きな組織は論理と合理で動いているわけですね。我々の近代社会というのは、論理と合理という単線的な発想で処理をしている。処理ができるものは概ね処理をしているんじゃないかと思います。しかし今は処理のできないことが問題となって浮かんてくるんじゃないかと。

たとえば、LGBTとか、あるいは多様な環境の問題とか、そういうような問題がやはり論理と合理の単線的なもので解決できないということですね。池澤さんのいう情というも

のは感情のことですね。それは僕はこういう風に読んだんですね。感情というのは、それは芸術文化ではないか、これを運動の中心に据えたらどうだろうか、ということです。なぜ芸術文化を戦略の中心に据えたかという、人間の本質は共感力と想像力、イメージネーションであるわけです。これにどう取り組んでいくか、これにかかわった取組みをしたらどうかということで始まったのが、最初にやったのが、障害のある人の詩に音楽の好きな若者がメロディをつけて歌う、わたぼうしコンサート、わたぼうし音楽祭というものです。

いま、音楽祭は今年で48回48年やってるんですね。わたぼうしやったことが、障害者運動ラディカルな時代もありましたからね、障害者運動にかかわっている人からは、「歌って社会が変わるものか、おめでたい運動」と我々は言われたんですけども、そういった団体は今はありません、消えています。でもわたぼうしは48回やっているんです。それでただ続けるじゃなくて、そこから障害のある人たちの詩人が生まれたり、作家が生まれたり、あるいは芸術をやっている人が生まれてきているわけですね。この芸術文化の可能性について、やはり正しかったなと今思えば、考えております。

さて、50年の歴史のなかで、市民活動を取り巻く状況の変化を感じております。これはまあ時間がないので、言えませんが、この社会状況の変化が、今の NPO の皆さんが苦戦しているところにつながっているんじゃないかと思えます。その一つは社会領域が縮小しているということです。たとえば、都市部で活躍していた青年会議所、JCと我々は言ってますけど、青年会議所がどんどん無くなるか合併したり、農村部で頑張っていた青年団もほとんど無くなりつつあります。地域をケアしていた青年会議所や青年団というのが衰退するか、あるいは消滅しているということですね。これら社会領域が、これだけではありませんけども、どんどん縮小している。

もうひとつは、いわゆる中間層というものが消えつつある。学生、若者、主婦、これはボランティアの担い手として僕らが市民活動をやっていた時には支えてくれた人たちです。いまはどうでしょうか。学生はアルバイトで忙しい、あるいは、若者は非正規雇用でボランティア活動などできない、主婦は生活が苦しい。いわゆる経済格差が大きな影を落としている。そして中間層が消えつつある。

もうひとつ大事なことは、社会意識がこの50年の間に変わってきているということです。ひとつは個人主義がやっぱり強まってきているということ。そして強まったことで何が起きているかという、ミーイズム、自己中心、自分の中心の。このミーイズムは、他人のことや社会のことは無関心、私が楽しければいい、私が良ければいいという考え方ですね。さらに問題は、アベノミクスで新自由主義、アベノミクスだけでなく小泉政権から始まっていますが、新自由主義が日本に定着して、今だけ金だけ自分だけ、こ

ういう風潮がどんどん社会に流れています。

もうひとつ僕が常々気がつくのは、ビューロクラシー、官僚主義が広がっている。特に市民活動のなかでもそうですけども、日本は官僚システムというのは、ツリー型ですね。樹木型、ピラミッド型があって、こういうものが民間にもNPOのなかにもそういうのが取られる。それを拍車をかけるのが評価という。僕は評価っていうのが嫌いなんです。評価というのは、やったら評価しないとイケないですね、レベルが上がってるとか。でも、評価は画一化なんです。同じような、個性的な、評価、アリスのような個性的なものがみんな評価でやっていると画一化される。こういうビューロクラシーってのは、ツリー型よりも依存型、根っこ型というか横型で、いろんな人たちがかかわって、横でどこかで断ち切られても、他のところからカバーして根を生やすというような依存型というのがどんどん消えていっているんじゃないかということです。

それで、依然として強いのは、お上に従う、という考え方ですね。お上がやっぱり強い。こういう言葉があります。3日前にオーストラリアからふたり人が訪ねてきて、いろいろ話をしたんです。実は来年2月にパースというところで、障害者芸術の大きな国際的なイベントをやりたいので協力してくれということで、いろいろ話したら、やっぱり共通して向こうの人がよく言うのが、ソーシャルチェンジって言うんですね。これは、日本ではあまり聞かない。海外で特に欧米の人たちと交流すると、出てくるのはソーシャルチェンジ。そういうことが日本のなかでどんどん無くなってきているということです。

ソーシャル、社会的とはどういうことなのかというと、簡単に言えば、弱いひとを守ることです。これが無くなっている。ちなみにぼくも社会福祉法人の理事長ですけども、社会福祉法人って全国にすごくいっぱいありますよ。でもだいたいは社会が抜けているんですよ、福祉法人なんです、サービスだけをやれば良いという。社会は消滅している。これは良くない、ということで、我々は細々ながら子ども食堂を展開して今いろいろやっていますが、社会と向き合っていくという、そういうことがどんどん消えている。

社会というのは、よく言われるんですけどね、みんな、ということが社会といわれる。あっちこっちいまキャッチコピーでも「みんなのなんとか」とか「みんなのレストラン」とか「みんなのホテル」とか言われていますけどね。みんなじゃないんですね、一人ひとりなんです、社会は、一人ひとりなんです。つまり一人ひとり、ということを強調すれば、さっき言った個人主義になります。でも個人主義を徹底していけば、社会はバラバラになります。開かれた一人ひとりの、ひとりを開いていくことがやっぱり我々の非常に大事なことじゃないかと思えますね。いま、この一人ひとりの、というと、バラバラなことと話をしましたけど、コミュニティというのがそうです。コミュニティというのはある意味では排他的であったり縛ったりするような面がありますけど、お互いのことを知っているとい

うコミュニティは、それらに力がある。このつながりの価値を通して、つながりの回復をしていく。そして人々が心を回復させるという、こういうことが大事ではないかと。

いま我々がやっていることは、ケアリング・ソサエティという取組みをやっている。それは住友生命福祉文化財団と一緒にあって、ケアする人のケアセミナーを全国各地でやっています、もう15年くらいになりますね。弱さを共有し、つながりを回復する。つまり競争型社会からケア型社会、いわゆるケアリング・ソサエティをどうめざしたらいいのかというところのセミナーをあちこちでやっております。

ここに流れる考え方は「素朴な思想と、それを支える素朴な感情」。これを大事にするということですね。素朴抜きで、思想とか倫理とか感情とかそういうものを語るんじゃないで、素朴な思想とそれを支える素朴な感情を大事にする。ケアする人のケアセミナーで非常に人気があるのは哲学カフェ。哲学者がいて、ケアとか助け合ってるとか、いろんなやってる人が話をする。その話は脈絡はないけども、哲学者が丁寧に聞いていて議論をするという哲学カフェをやっています。これは非常に効果がある。そういうことをケアリング・ソサエティを生み出すということで新しい取組みを展開しています。

ところで、今日のテーマである市民社会とは、社会とは何かはお話しましたが、市民とは何かということもちょっと話しておきたいと思います。

市民というのは、僕は昔から言っている市民は、横浜市民とか川崎市民じゃないですね、もっと普遍的な意味の市民ですが、自律と連帯を兼ね持つ、自律と連帯の精神を兼ね持つ人たちを市民というんじゃないかと。自律とは、自ら律するほうの自律。自ら立つではないんですね。この自立、我々若い頃から、日本人は寄っかかってやる、もっと自立をめざさないかん、個の確立とか自立とかよく言われました。そういう教育もされていましてけども。でも、自ら立つという自立は近代のイデオロギーなんですね。これをどうも日本人はまともに引き受けすぎてるんじゃないかと。この自ら律する自律とは、英語でオートノミー、自治という言葉になりますけども、関係性のなかで、自分は自分であることを律していく自律なんです。このオートノミーというのをやっぱりもっと考えていく必要があるんじゃないか。連帯というのは、言葉を換えれば協働、ともにつくる協創というようなことに。まあ、いろいろな協働、同じくする。こういうものが、やっぱり連帯なんですね。

ちょっと飛躍した話をしますけど、我々生き物の特色は内発性と自律性なんです。どういうことかという、内側からおのずと湧いてくる力を大切にして独自の目的や意義や価値をもって動く、これが生き物、生物なんですよ。

このちょっと最近出会った面白い話をしますけども、たんぽぽで、組織で4月になったらやりますけど、3年間やれなかったことは飲み会なんですね。そのときに2年目の

若い青年が僕のそばに来てお酒飲みながら言うんですよ。「播磨さん、植物と植物が会話するっていうようなそういうのを書いた本は無いですかね」。僕は帰って、どっかで古い手帳出して見た。そしたらまあ、今の子はこんな本は読みませんかね。でも二つほど出てきたんですね。

『マザーツリー』という本。これは森に隠された知をめぐる冒険と書いてある。もうひとつはね、人間中心に、人間中心でない視点から人類の今後を探ると書いてある。この本のタイトルがすごい長い。『ヒトという種の未来について生物界の法則が教えてくれること』。こんな長い本、今若い人は読書はあまりしないですけども、『マザーツリー』の方がいいかなと思って、買ってプレゼントしました。たんぼぼでベストセラーになっている本があります。『はずれ者が進化をつくる』という本なんです。静岡大学の稲垣先生という雑草研究家を書いた本、これはものすごく貴重な本なんです。何かというと、多様性とは何かとか、雑草はニッチで生きてるとか、ニッチとは何かとか。ちなみにこれは実は町の本屋でブラブラして見つけた本なんですけど。生物学の本ってのは難しかったですよ。この『はずれ者が進化をつくる』という本の帯を読んだら、中学入試で出題ナンバーワンで書いてある、これは読めるということで、本当にわかりやすく平明に。

つまりこれは何が言いたいかというと、いま NHK でも牧野富太郎をやってますね。つまり我々は人間だけが中心であるという考え方を、違う、生き物の生物の中に生き方がある。つまり我々は行き詰っているわけですね。西洋近代を疑えと僕はよく言いますが、そこに生物界のいろんな生き方、あり方を学ぼうということ。このさっきの西洋近代を疑え、我々の日常的生活というのは西洋近代の枠組みのなかで生きているわけです。人間がこの世界の主人公で自然を作り変えるという発想でうまれた近代主義が発展を遂げたわけですね。科学技術によって自然を支配し、人間の自由・平等・物質的な豊かさを求めていく、これが近代主義であってこれは西洋文明なんですけど、こういう方がいいのかということです。

この地球上で生きているのは人間だけじゃないということですね。多様性がある。また我々も人間社会の多様性の尊重が大事だというのが、こういうことだと思うんですね。一人ひとりが異なる存在であること前提です。人々が数で一括りにされるところに多様性はない、ということなんです。僕が障害者アートをやったら、もう障害のある人が描いたらみんな違います、ひとりひとりが個性的です。それが人間なんです。多様性の尊重、いろんなLGBTとか、いろんなところで、いま多様性の尊重を言われてますけども、ここはひとつの鍵で、多様性がなぜ大事かということ、もちろんいろんな生き物がつながり合って生きることが大事だということと同時に、多様性はクリエイティビティをもっている、創造性をもっているということですね。これをやっぱりしっかりと確認しておく必要がある。

僕はずっと市民活動やってきて思うことは、思い込みからの脱却をせにゃいかん。た

たとえば、経済成長すれば、豊かで幸福な生活ができるという成長神話をまだ我々は信じているわけです。でも豊かな社会は日本は実現しました。でも、幸福なのか。世界の幸福度ランキングで最下位に近いですね。みんな幸福と感じていない。それともひとつ大事なことは問われるのは、いい生活をするのか、いい人生なのかということです。一生懸命勉強すれば出世ができて、いい生活ができる。タワーマンションなんかに住めるってことですね。でも、それでいいのかっていうことです。いい人生はやっぱり出会いですね。多様な人と出会って、そして多様な関係のなかに自分が生かされてる、あるいはまた輝いていることが、いい人生ではないかということです。残念ながらいい生活をめざす人が多い。世の中、不便、不備を当たり前のもので諦めてしまって、自ら改善していこうという人が少なくなった。所詮世の中はこんなもので諦めて、それどころか改善をしていこうとしてアリスのような頑張ってる人たちの足を引っ張る人がいる。疑うことを疑えというのを、やっぱり我々言っていけないといかんです。

いろいろ分析しましたが、この市民活動50年やっていくなかで、提案をいくつかやっておきたいと思います。

ひとつは柔らかい技術を見直していくということ。柔らかい技術とは、ブリコラージュ。こんなこと言えば、若い世代から「播磨さん古いね」と言われるけど、昔、文化人類学のブームのときに、ブリコラって流行り言葉でしたけど。僕はいつもよく言われるんだけど、たんぼぼは何もない、奈良という田舎のところで、古いだけが取り柄、歴史があるけども、財団つくって、つくったところは NPO なかったですけどね、財団をつかってやってきたわけですけどね。よく言われるのは「無から有ですね」と言われるんですね。そんなことはありません。有限なるものから組み合わせで有限なるものをつくってきたってことですね。無から有なんてないわけですね。我々はブリコラージュという、日本では日曜仕事とか言われてますけど、簡単な身近にある道具と身近にある材料を創意工夫するという。こういうことを繰り返しやって、今日のたんぼぼが出来上がっていくわけですね。

それともう一つは、いまインターネットとか SNS、そういうものがあって、みんな使ってメールでやってますけど、でもハイテクも生かしていないかんけども、実はローテクもあるぞと。我々が運動を始めたころは、パソコンが普及しはじめ、インターネットはなかったですね。そのときにやったのは口伝手渡し、口で伝え、手で渡す、ということの基本にしていた。たんぼぼの支援団体の組織は多いときには全国で3000人ぐらい居たんですけど、今ちょっと減りまして1000人超えるんですけど、この口伝手渡しでつながっている人たちは今も支援者です。ハイテクの人は消えることがあっても、やっぱり手渡しの人は確実に、思いをもって寄り添ってくれている、支援してくれている。これがそういう柔らかい技術、口伝手渡しのようなローテクをやっぱりちょっと見直してもいいんじゃないか。ただもうメール送ったり、それで済むんじゃないかと、やはり口伝手渡しって、

僕は飲み会も非常に重要だと思っている。今回は飲み会に参加できなくて残念ですけど、帰りますけど、飲み会で雑談することが大事ですね。そこで伝わっていく。

二番目はメディエーション、触媒のことですね。一時、コーディネーションとかコーディネーターが大事だといわれましたけど、僕は違うんじゃないかと。メディエーション、いわゆるメディエーターが化学反応をつくるということが大事ですね。そのためには、異なったものから学べ、異なったものへ持ち込め、異なったものを組み合わせ、こういうことが大事。

三番目は、今の言葉をちょっと生かして言えば、アップデート、革新をもたらせ。そういう我々も障害のある人のプロダクトを作るときには、テクノロジーをいっぱい利用します。新技術、3D プリンタとか、そして新しいものを作る。今の Good job!センターなんかで取り組んでいるのはテクノロジーと芸術とケアをつなぐ、テクノロジーをやろうと言っている。なぜこういうことをいうと、テクノロジーとは、産業と軍事につながって発達してきた、トライアングルですね。ロシアのウクライナ侵攻を見たらわかるように、産業とは軍事ですよ。去年大阪でユネスコの人たちが来て平和を考える会があって、基調講演を頼まれて、そこに僕はテーマで戦争と文明、文明が戦争とずっとともに発達してきた、こういうものを問うていく必要があるんじゃないかという話。これはちょっと長くなります。

もうひとつはアップデートで言いたいのは、成功の復習というのがある。成功体験があると変わらないです。皆さん古い世代の方は、全ボラなんてありましたよね。全国ボランティア研究集会。もう日本青年奉仕協会は無くなって破産してます。あれもかつてはボランティアの青年たちが湧き出てきたんです。それくらいあぐらをかいていたら国からの補助金がなくなって破産。もうひとつ関西の雄である大阪ボランティア協会も停滞してます。あそこも成功体験があるんですね。あのころはああやったらいっぱい来たとか、あのころは成功したとか、こればかりが頭にあるわけですね。時代が大きく変わってるのに昔のイメージがずっとあるわけです。成功の復習、これは我々運動をやっている者に、常に自戒としてあります。

四番目は、アソシエーション。このアソシエーションをもっと重視していく。ソサエティよりも一般的ですね。共通の目的のために作られた、組合や教会や連合といったものがアソシエーション。実は奈良の方で、福祉型事業協働組合ができて活躍している。福祉施設とか NPO とか企業の人々が組んで、あたくし組合というそういうアソシエーションをつくりました。これが効果的なんですね。いわゆる受注が来て、注文が来て、こうやって調査もやってくれとか行政からも委託が来て。NPOもみんな個性的ですから、なかなかつながらない。あたくし組合やってる若い人たちとちよっとお酒飲んで食事会やっただんですけども、その時に僕は言ったんですね、我々は言葉が大事だと。行政語、企

業語、市民語、3つがある。我々は3つを使いこなせないかんという話をしたら、組合の担当してる青年が言うんです「播磨さん、市民語もバラバラですよ。もうみんな言葉が違う、共通言語がないことが、これが悩みなんです」と。これはなんか考えないといかんですね。それはたぶんね、みんなうちは特別なことをやっている、だけで集まっている。だけど、そんなことはない。違いは大事にしてもいいけれど、共通のものもあるわけね、普遍的なものね。それはよく集まって、アリスのような組織のところで集まって議論していく、共通言語をもつことが大事、これ細分化をしていくとバラバラの NPO はやはり消滅していく。

5番目は大事なものは市民教育ですね。シティズンシップ・エデュケーションという。これはね、具体的なことを言えば、我々障害のある人の作品を集めて、町のレストランやカフェあるいはお店の人が来て、個人もありますけど、お見合いして気に入ったものを持ち帰って一定期間飾るといふそういうプロジェクトです。だいたいアートとかは、学芸員とか、あるいは有名人がこれはいいとか言ったら、みんな自分の感性で選んでいく、引き受けていく、それで飾っていくと、「あっ面白いですね」って会話が始まる。描いた障害のある人もお店に訪ねていくと、つながりがうまれていく。ちなみに奈良県は企業の障害者雇用率が2年連続日本一なんです。奈良県が行政が積極的に施策をうっている、そういう県ではないんですね。では何かというと、こういうものが積み重ねていくと、障害者感とかあるいは市民教育ができてきて、「障害者は特別じゃない、可能性がある人だ」ということになっていった。

最後の方になりますけども、もう一つは、大事なことは、僕が今まで話したことは、現場から学んできたことですね。現場には2つありまして、アクチュアリティ、ありのままの直接経験こそが新しい知の創造の原点であるということを僕はいつも思っています。そこから共感を媒介にして共通の善とか価値がうまれてくる。簡単に言えば、経験知を尊重するということですね。それともうひとつ大事なものはリアリティ。これは主体と客体を分離して、客体を外から傍観的に対象化して観察するということなんです。これはもっと簡単に言えば、現場でやっている経験値といふのかな、そういう発見したものを、社会の思想の流れにどう位置するのか、あるいは哲学や美学のなかでどう捉えられるのか、そしてそれらは未来にどうつながるのかといふのを、やっぱりきちんと捉える。僕は障害のある人の福祉の現場に飛び込んでやっているわけだけど、絶えずスタッフとか障害者の人たちがやっていることを観察し、洞察し、創造力を発揮して、表現をしている。この観察力、洞察力といふものが大事だと。そしてイメージーションで膨らましていく。

いろいろ言いましたけども、我々の市民活動を取り巻く環境は厳しい。企業も社会

貢献って言ったらもう SDGsに向かっていってるから、企業がお金を出すということは、日本の企業はいま衰退している、貧乏になっていってる。かつてのバブルのように、ボンボンお金を出してこない。救いは利他の心が大事だということはコロナでみんな感じているわけですね。フランスの経済学者のジャック・アタリという人が「パンデミックを超えるためには利他主義が大事だ」ということで、日本の研究者はやたら利他の本をばっとうち出しましたけど、ちょっと荒々っぽい本も多いですね。そういうことを利他主義というが普及していく。利他は何も寄付だけじゃありませんね。知識とか、技術とか、あるいはネットワーク、そういったものも利他なんですね。そういうものを生かす時代が来ているということです。

最後に、50年やってきて、大きなものとの闘いをやってきて、負け戦もありますし、勝った部分もありますけども、僕は実は新聞記者時代から日本の市民運動、住民運動というのをずっと取材をしてきて感じることは、勝とうとして負けていく日本の運動なんですね。みんな勝とうとするけど最後は負けてるんです。なぜそう負けていくのか。僕はたんぼぼの運動のときに皆さんに言ったのは「負けない運動をしましょう」ということだ。負けない運動というのはやっぱりあるんですね。こんなことを言ったら最近、去年かな、本の広告を見とったら、天才棋士の藤井聡太さんが言ってます、対談なんかで「ぼくは勝とうとしてやってません、負けない将棋をやっています」と言うんだよね。これはやっぱり面白いですね。その話をしたらね、社会学者の大澤真幸さんがね、一緒に対談したことがあるんだけどね、その話をしたら盛り上がって、「藤井聡太さんはAIと向き合って将棋が強くなった」と言うんですよ。そういう話を大澤真幸さんが言うわけです。いちばん大澤さんが興味持ったのは「AI に勝つためには藤井聡太さんは悪手(悪い手)を使う。これが負けるんですよAIが」。そういうことを聞いて、そうだ、悪手(悪い手)。

これは官僚出身の人もいるからちょっと耳が痛いかもわかりませんが、僕はね大きな組織、特に行政とかね、あるいは大きな企業なんか、みんな論理と合理なんですね。だから論理と合理でいったら負けるんです。でも、僕は発見したのは、その論理と合理の人たちに打ち負かすのはフェイント攻撃が弱いということ、彼らは、直線なんです。だから芸術文化なんて全くわからない。フェイントなんですよ。僕はこれから文化の時代だと思ってる、一緒に協力やりましょうなんて。でも、これが行政マンとか行政との闘いとか、企業との闘いとか大きな組織との闘いではフェイントをかけなさい。そのフェイントのかけ方が巧妙であれば生き残れます。まあ負けない戦略を伝授してます。

はい。最後に、僕は新聞社の入社試験で、一次通ったら二次は面接なんですけど、そのときに試験官が尊敬する人物を書いてくれと、参考資料で質問するので。そしたら僕は高校時代に読んだセルバンテスの『ドン・キホーテ』がものすごく感銘を受けてたんで「ドン・キホーテ」と書いたら、えらい叱られました。他はノーベル賞の湯川秀樹さ

ん、松下幸之助さん、最後には両親とか。君だけちょっと違うとかと言われて、えらい叱られました。しかし、ドン・キホーテ、僕は本当に好きなんです。それが松本幸四郎、いま、白鷲になってる、「ラ・マンチャの男」というミュージカルになってる、これがいいんですよ。中世の騎士の世界を取り戻そうということで旅に出るわけですけども、酒場で騎士の恰好して行ったら、みんなが笑う。騎士道の世界の話をする、そしたらみんなに大笑いされる。そのときに松本幸四郎、いま白鷲さんですね、実は松本幸四郎さんね、ぼくと同じ年なんです。踊ったり歌ったりそれにも感動してますけどね。そのときの松本幸四郎のラ・マンチャの男の言うセリフがすごい。『夢を追いかけて生きるのを狂気というならば、現実に妥協を重ねていくのも狂気ではないか。いちばんの狂気は人間のあるべき姿のため闘わないことだ。』と。

社会のあるべき姿のために闘ったアリスの皆さんに敬意を表して、講演を終わりたいと思います。ありがとうございました。